

のクラスに日本人の友だちが何人もいるような場合は別ですが)半年後に、その子がどれくらい英語を使えるようになったかを見れば、この状態が英語の力をつけるのにどれほど効果的かは一目瞭然です。本当に英語にどっぷり浸かれば、子どもの英語のコミュニケーションの力がみるみる伸びて行くのは本当です。ただし、その過程は、知らない人が無責任にいうように、「自然に」「苦労なく」というのとはほど遠いものであることは、読者の多くが身にしみて理解しておられることでしょう。

日本の学校案内などで、「イマージョン」という言葉を目にすることがありますが、よく読むと単に「一部の授業を英語で行っている」という意味だったりします。これだけでは、「どっぷり浸かる」には、ほど遠いと言わなければなりません。実は、今行われている「イマージョンプログラム」では、実際には immersion の状態にはなっていないことが多いのです。

ご承知の方も多いと思いますが、現在の「イマージョンプログラム」の始まりは、カナダ、モントリオール郊外の幼稚園で1965年に開始された、フランス語学習のためのプログラムだと言われています。これは、引き続き、小学校のプログラムとして拡大していきます。英語を使っている子どもたちが通う学校のフランス語の授業が、実際にフランス語を使いこなす力につながっていないという批判が、このプログラムを生み出す引き金になりました。背景としては、フランス語が公用語であるケベック州での英語系とフランス語系の住民の対立がありました。英語系の住民の子どもたちが、さまざまな偏見にさらされる前にフランス語を習得し、フランス語の文化に親しむことは、住民間の理解を深め、社会の不安をやわらげることにつながるだろうと期待されました。

この時の方式は、フランス語だけを使用するいわゆるトータル・イマージョンで、3年生の終わりまでは授業も生活もすべて英語でなくフランス語を使うという徹底したものでした。後に2年生から英語を徐々に使っていく方式に修正されます。

イマージョン・プログラムがスタートすると、その効果についていろいろな研究が行われました。その結果、このプログラムで学習した子供たちは、フランス語を理解し、使いこ

なす能力を伸ばしているだけでなく、フランス語を使おうとする積極的な姿勢を持っていることが分かりました。また、子供たちのフランス語系住民に対する態度もより好意的な傾向があることも示されたのです。

さらに、第一言語である英語の授業は遅く始められるにもかかわらず、六年生ぐらいまでにはイマージョンでない子供たちと変わらないレベルに達すること、教科の内容の理解度にしても、一時的な遅れが見られることはあっても、結果的には遜色が見られないことが報告されました。

イマージョンプログラムはすぐれた教育の方法として注目されるようになり、カナダ全土に広まっていきました。

1971年に、カリフォルニア州のカルヴァ・シティで、アメリカ最初のイマージョン・プログラムがスタートしました。ここで使われた言語はフランス語ではなく、土地柄を反映してスペイン語でした。

その後、アメリカ国内でもイマージョン・プログラムを採用する学校が徐々に増え、その地域に応じたバリエーションが展開されるようになりました。使われる言語もフランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、日本語、韓国語とつぎつぎに増えていきました。

バージニア州フェアファックス・カウンティでイマージョンプログラムが始まったのは1989年のことです。私は小学校の教師として1992年から2001年まで教えました。

日本の学校で「イマージョン・プログラム」を取り入れるとしたら、それにはどんな意味があるのか、日本の子どもたちに外国語をどのように学ばせたらよいのか、そのような疑問を頭におきながら、今回は、イマージョンプログラムの教室にご案内したいと思います。

* * * * *



ケベック州「フライドチキン」の看板もフランス語です。